むぎの郷 通信

“麦の郷とは” 住民のニーズから
生み出され、住民の手によって育てられる

April 2021

ソーシャル ファーム ピネル／くろしお作業所／麦の郷訪問看護ステーション／麦の郷居住福祉事業所／はぐるま共同作業所／はぐるま共同作業所　和の杜／はぐるま共同作業所　ラ・テール／麦の郷印刷／障害者就業・生活支援センター つれもて／麦の郷　和歌山生活支援センター／麦の郷紀の川生活支援センター／ハートフルハウス　創／むぎピース／サポートセンター「麦の郷」／こじか園／第二こじか園／ソーシャルファームもぎたて／Po-zkk／六星舎／叶夢向／創cafe／事務所／麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所

揮毫：伊藤静美　発　行／麦の郷情報管理委員会　〒640-8301 和歌山市岩橋643　TEL(073)474-2466　FAX(073)474-4637　http://www.muginosato.jp

麦の郷紀の川生活支援センター
さおり織レク　2.20（土）

くろしお作業所
花見　3.24（水）

創 cafe
防災訓練　3.17（水）

社会福祉法人一麦会
正職員辞令式　3.31（水）

私たちのめざすもの ～麦の郷４つの理念～

1).麦の郷は、日々学び、育み、発信し続ける人材を育成し、地域福祉の発展を目指します。
2).私たちは、ものづくりを通じて障害のある人と地域の共存を実現し、互いに豊かになる実践を目指します。
3).私たちは、社会的不利の状態におかれている人々の課題を解決するために、広範な人々とつながりを深め、ともに社会変革をめざします。
4).麦の郷は、全ての人が平和で安心して暮らせる社会づくりのために人の輪を紡いでいきます。

もっとひろがれ生涯学習
～未来へつながるトークセッション～

2月7日（日）ゆめ・やりたいこと実現センター（以下センター）の成果報告会を紀の川市那賀総合センターにて開催しました。会場にはセンター参加者、講座講師、地域のボランティア、学校・福祉・行政関係など60名が来られ、3年間の活動を一緒に振り返りました。

第1部のトークセッションでは、元和歌山大学副学長・和歌山大学名誉教授の堀内秀雄さんと和歌山大学教授の山﨑由可里さんが、支援学校卒業後も学びを続けることの重要性を討論されました。「だれもが障害の有無に関わらず、積極的に貢献できる社会が必要。センターの活動は新しい線や面となって広がっていくための大きな一歩。この活動には本当の教育があるのではないか。」と、堀内さん。山﨑さんは、「粉河山﨑邸での『夕刻のたまり場』で特別支援フォーラムを開催した際、どんな人でも受け入れるという雰囲気で、緊張感がなくこころ穏やかにできる場所だと感じた。活動の中身を作る中心は当事者であるのでは。」と、話されました。

第2部では、センターの活動に関わった人たちから発言していただきました。たまり場参加者からは「いつも誰かがいるので楽しい。」、地域のボランティアからは「『これしなさい』ではなく、みんながやりたいことをしているのがいい。」、つくし医療・福祉センター院長で連携協議会委員の飯塚忠史さんからは「私の働いている重症心身障害児者施設で講座を開催してもらった。入所者のみなさんが出来ないと思っていた活動などが、できることを知ったのも大きなことだった。」と、それぞれの立場で学びがあったことを伝えていただきました。

今年度はコロナ禍という難しい状況での活動になりましたが、「教える・教えられる」という関係ではなく、みんなで学び、こころ豊かに成長し合える有意義な時間を過ごせたと思います。これからも地域と繋がり支え合いながら、障害のある人の生涯学習をたくさんの人たちと取り組み、広げていきたいです。

（ゆめ・やりたいこと実現センター　尾方　千春）

ポズックの作品 海を渡る
～フランスでの絵画展に出展～

ポズック楽団がコロナの影響をもろに受けている中、とてもうれしいニュースが舞い込んだ。なんとフランスのギャラリー主催者から「フランスで行われるグループ展に出展してくれないか」というオファーが!!ギャラリー主催者のこころを鷲づかみにしたのは、ポズックの画伯「ゆいちゃん（宮本悠衣さん）」とポズックカレンダーで活躍する「ともさん（貞包朋子さん）」の作品。

フランスで行われたグループ展は2020年10月17日から12月末まで開催（コロナがなかったら、ともさんと家族はフランスへ行く計画を立てていたのに残念）。

遠くフランスの地でも、認められたことの嬉しさに「人間の欲でなによりも強い欲求は承認欲求だ」と伊藤静美さんがよく話してくれたことを思い出します。認められるために作品や商品づくりをしてきたわけではありませんが、でも、二人の作品に込められた内なる想いや力が理解され認められたのは、とても嬉しいことです。

さらに嬉しいことに出展していた作品すべてが完売し、みんなで喜び合いました。

ここで選ばれた二人をわたし（野中）目線で少し紹介します。

ゆいちゃんってこんな人

重度の自閉症。幼いころから絵や造形の才能を開花させ、言葉によるコミュニケーションは少ないが、その内面世界を一筆一筆で伝える。何カ月もかけて色とりどりのサインペンで少しずつ重ね塗り完成させるゆいちゃんの絵は、「家族で旅行楽しかったよ」「イルカすき」「お花がきれいだよ」「たこ焼き好き」と楽しかった想い出を画用紙いっぱいに描き、そして、私たちに語りかけてくれる。

ともさんってこんな人

発達障害と統合失調症。私とは、紀の川生活支援センターの時からの知り合いで、その頃は、常に「私、迷惑かけていませんか」「私ダメなんです」「いないほうがいいんです」とネガティブな言葉ばかりで、それは、社会に適応しなければならない、合わさなければならないという呪縛が絡みつき、「社会や様々なモノの見え方が違う自分はダメなんだ」と、ともさん自身も家族も思っていたに違いありません。しかし、ポズックで「自分自身でいいんだよ」と思えたときにその才能を開花。描かれる作品は、奇抜で独創的な色づかいと表現で誰にも真似は出来ない、ともさんワールド。

（Po-nkk　野中　康寛）

＊むぎ・わくわくレポート 15＊

歩いて作業所へ通えるようになった！

くろしおのたんぽぽ班には紘平くんという仲間がいます。くろしおに通い始めて12年が経ちます。入所したころは皆と一緒に行動することが難しく、運動や買い物のために外出してもすぐに座り込んでしまう毎日でした。

しかし、12年間、車が大好きで毎日のように外出の取組を続けました。

「一緒に頑張って歩こう！」と皆が応援し続け、歩く距離は次第に増えて、皆に合わせて一緒に歩くことも出来るようになったのです。

実は紘平君はくろしおのすぐ近くに自宅があります。そこで昨年のある日、お母さんと相談をして「やってみようか！」と、家から50ｍ程の一直線のあぜ道の先にあるくろしおの前に職員が立って待つと、立ち止まることなく職員のもとまで歩くことが出来たのです。

それを見たお母さんは、「この子がこんなことできるようになったんやね」と涙を浮かべて喜んでくれました。

くろしおへ自分の足で向かうことができるようになった紘平君、ただ歩けるようになっただけではなく、大好きな人たちがいるから行きたい。それが確信になった出来事でした。（くろしお作業所　城　喜貴）

紀の川生活支援センター ピア・スタッフについて

私は約19年前、まだ紀の川生活支援センターが岩出市船戸にあったころ、初めて麦の郷の門をたたきました。

生まれつき顔にある赤紫色のアザに対する社会からの差別や偏見に長年苦しみ、現在は精神科に通院しながら、ピア・スタッフとして働いています。

紀の川生活支援センターには、様々な障害のある人、生きづらさという障壁を抱えた人が多く訪れます。私はその中で、これまでの自身の体験を活かし、当事者ならではの視点から物事を捉え、問題提起をし、障害のある人や生きづらさを抱えた人が、より自分らしくいられる居場所づくりを目指しています。

私自身、まだまだ心が不安定な中でのピア・スタッフという仕事は、時に人や問題の板挟みとなり大変苦悩する事もありますが、それ以上に、大きなやりがいや喜びを感じられる仕事でもあります。

センターを利用される皆さんと私は「利用者とスタッフ」ではなく、同じような思いをもつ仲間同士として、共感し、認め合い、支え支えられる関係でありたいと思っています。

辛い事の多かった人生ですが、皆さんに出会えて、沢山の会話を交わし、笑っていられる今、この顔で産まれ生きてきて、本当に良かったと思える私です。ありがとう。

（麦の郷紀の川生活支援センター　長谷川　志穂）

見て、聞いて、体験して学習しよう

障害者就業・生活支援センター　つれもて

去る2月24日、メンバー8名、職員5名、総勢13名で和歌山市消防局防災学習センターにて在職者交流会を行いました。今回の目的は、メンバーの生活環境も多様で、両親死亡でやむを得ず一人暮らし、家族の高齢化、グループホーム入居など、また就業中の場合も想定し、防災について学びを深めあうために企画しました。

企画内容は下記の通りです。

・地震体験、起震車での疑似体験→最大震度7の大地震を疑似体験することができ、体験前に震度の大きさの希望を確認し負担のないようにと調整しました。

・災害体感シアター「風水害編」→床面を重低音で振動させるボディソニック装置と、6方向からなる送風装置、5+1ch音響装置、150インチの大型スクリーンによる大迫力の映像を体感しました。

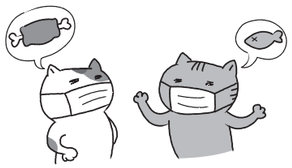
・初期消火体験→消火器の使用方法と、センサー式の訓練用消火器を使用して体感しました。

・119通報体験→119通報をシミュレーション体験しました。

体験を通じてメンバーからは、「揺れが始まると頭が真っ白になり机をつかんで揺れが終わるのを、ただただ待つことしかできなかった」

消火体験でも煙はでないものの「勢い強い炎が怖かった」「自宅に消火器あったかな？」「使用期間もあるんやな、見たことなかったわ」など普段の生活では関心のなかったことも今回の学習で関心を持てたようです。

119通報では、「もしもの時、気が動転してしまう」が圧倒的に多い感想でしたが、正確な通報が、火災、救急、救助の現場活動に繋がることから、「自宅や職場、普段の生活でよく利用する場所の住所、名前、目標となる建物の情報をメモに書いて持ち歩いたらどうやろ、電話機の近くや家族で共有できるところに張り付けてもええな」など対策についても貴重な意見が聞けました。



今回の学習で、学んだことが生かされることは、正直起こってほしくないことですが、今年は、東日本大震災から10年…

和歌山県では今後30年以内に巨大地震が発生する確率は70%～80%だと言われています。

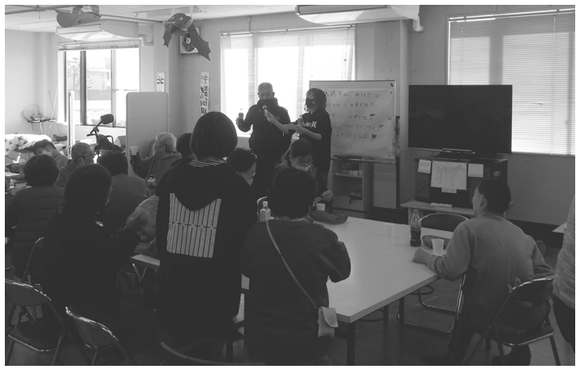
今年に入ってからも和歌山県北部を震源とする地震が多く、3月15日未明にあった震度5弱の地震は、南海トラフが関連する地震ではありませんでしたが、記憶に新しいと思います。いつ起こるか分からない災害に、いざという時の行動力を高め、1人1人の防災能力の向上に繋がる交流会だったと思います。

（障害者就業・生活支援センター　つれもて　魚谷　みどり）

くろしお作業所 なかまの新年会2021 還暦おめでとう！

2021年1月21日（木）に、くろしお作業所内で行われた「なかまの新年会・還暦を祝う会」。

例年のように華月殿で仲間、職員、関係事業所から来てくださった方達と一緒に盛大にお祝いしたかったのですが、昨年から続くコロナ禍の中で、集団での外出、外食は難しいと判断し、くろしお作業所内で行うこととなりました。



昼食は新年会らしく和風のお弁当を。「お弁当が大きかった！大満足」、「とっても美味しかった」と新年会が終わった後も仲間からは好評の声が続々と届きました。

昼食を食べ終え、くろしお作業所の一番広い活動ルームに全員集合して新年会開始です。初めに施設長から開会の挨拶、続いて還暦を迎えた宮本さんから乾杯の挨拶、年男・年女の出し物、各班からの出し物、還暦のお祝いへと順に進んでいきました。還暦のお祝いでは、宮本さんと昔から関係の深い方々からいただいたビデオメッセージをサプライズプレゼントとしてその映像を見ていただきました。無認可時代の廃品回収をしている写真や、今までくろしおの皆と歩んできた数々の活動を嬉しそうに時折目を潤ませながら真剣にメッセージを見る宮本さんの姿に、例年のようなお祝いの仕方はできませんでしたが、違う形でも仲間が喜んでくれたことに、私たち職員もほっと胸を撫でおろしました。

昨年は仲間にとって「我慢」がとても多い一年となりました。それは宮本さんにとっても、そうでした。毎年5月に開催される和歌山県障害者スポーツ大会に昨年も参加するはずでしたが、残念ながらコロナの影響で中止。障害者スポーツ大会に向け、昼休みの時間を割いて練習する宮本さんのうしろ姿を見ることで、僕も頑張ろう、私も頑張ろうと背中を押された仲間もたくさんいたはずです。今年の障害者スポーツ大会、今の段階では開催される予定となっています。もちろん宮本さんも意気込んで参加する予定です。今年の活躍に期待しています。

（くろしお作業所　川﨑　愛香）

こじか園生活発表会

2月13日（土）に生活発表会を行いました。生活発表会のねらいは、日々の遊びの中で子どもたち自身が楽しめるものを探り、子どもたちの好きなおはなしをおはなしあそびとして発表し、1年の園生活のまとめとして、日々の生活でつけてきた子どもの力を保護者・職員で確認し合う場と考えています。

例年、多くの方に観に来て頂いていますが、今回は、新型コロナウイルス感染対策として、観覧等の密を避けるため、保護者の方は1名に制限したり、子どもたちも一緒に各グループのおはなしを見ていますが、自分たちの出番の時に出て、出番以外は各部屋で待機など対策をしての生活発表会となりました。

たまごグループ（3歳児）は、『ぞうくんのおかぜさんぽ』あおむしグループ（4歳児）は、『おいもをどうぞ』ちょうちょグループ（5歳児）は、『おおかみと七ひきのこやぎ』のおはなしをしました。また、5歳児の子どもたちは、各グループのおはなしを忍者に扮して紹介したり、『うたえてのひら』を楽器で演奏しました。各グループおはなしを取り組んでいく中で、お面を作ったり、道具を作ったり、遊んでいく中で、少しずつおはなしの雰囲気を楽しめるようになったり、おはなしのやりとりを楽しんだり、役になりきって自信を持って演じる子どもたちもいました。当日は、少し雰囲気も違い保護者の所に行きたくなったり、泣いてしまう子どももいましたが、一人ひとりの楽しみ方、感じ方、自信満々に演じたり様々でした。

お母さん方も練習を重ね『はるちゃんのぼんぼりぼうし』のおはなしをペープサートで演じてくださいました。

生活発表会を通して、子どもたちの好きなおはなしが増えたり、1年の園生活のまとめとして、日々の生活でつけてきた子どもの力を保護者・職員で確認し合うことができたと思います。

（こじか園　滝本　容子）

地域活動支援センター ～合同スポーツレク～

毎年、和歌山生活支援センター・地域活動支援センター櫻、岩出障害児者相談・支援センターとの4事業所で合同スポーツレクを開催していましたが、コロナ禍の為、今年は岩出障害児者相談・支援センターとの2事業所で開催することとなりました。

普段かかわりのない事業所の利用者さんとの交流で、初めはお互いに遠慮しがちでぎこちなかったのですが、バドミントンや卓球・ボッチャ・ドッジボールと、いろいろな競技を共にしていくうちに気が付けば、自然と仲良くなり、打ち解けていました。

卓球の得意なAさんは、コートのネットの張り方から丁寧に教えてくれました。隣りのバスケットゴールでは、ホールインワンを競ってみんな真剣勝負になり、まわりにギャラリーを集めて、とても盛り上がっていました。

昨年12月15日に貴志川生涯学習センターで体験して以来のボッチャでは、みんな大興奮でルールの説明を熱心に聞き、すぐに練習を開始。両センター混合のチームになると、利用者さんどうしの距離が一気に縮まり、コミュニケーションも一気に増え、センター同士の垣根は消えて、とても大きな「ワンチーム」になっていました。最後のドッジボールで終わりの合図を伝えると「え～。もっとしていたい！」という声が聞こえてきました。

そして昨日、今までボッチャのことをみんなに教えてくれていた当センターをもうすぐ退職する支援者にBさんから「これからは、ぼくたちがボッチャを広げていきますね。」という言葉を聞き、ボッチャをはじめ、レクリエーションや社会交流を通じて、いろいろな体験に触れていくことで、自然とコミュニケーション力が身に着き、ひいては市民啓発活動に繋がっていくことを強く感じました。

また、今後も地域の活動支援センターと協働し連携することで、活動の幅をひろげ、地域づくりの一環を担っていけるように努めていきます。

（麦の郷紀の川生活支援センター　片木　美千代）

事業所を移転しました

六星舎

六星舎は4月1日より西旅籠町より和歌山市舟津町に移転し事業を開始しました。

5年前に視力障害を持った方でも気軽に参加できる事業所をとスタートし現在では、19名の内3名の方が利用されています。これまで視力障害の方は8名利用されました。開所当時4名だった利用者の方も現在19名の登録となり作業の安全の確保が困難となった為、今回移転を行い安全な作業空間の確保や事業所内での活動の充実を図っていこうと考えています。新たな事業所では1階を倉庫兼作業場として利用し2階はフロアー全体を作業空間として利用、3階は休憩室・事務室として作業と生活の空間を分けました。またすべてをバリアフリー化するためエレベーターの設置や車いす用のトイレも設置、段差も極力解消しました。

先日移転を前に避難訓練を兼ねて移転先の事業所の見学を行いました。利用者の方にとって、移転は一大事、不安や期待でいっぱいでした。いざ移転場所に車で移動しリフォーム中の新事業所を見た瞬間「きれいやなぁ」「広いなぁ」などの意見が出て少しは不安も和らいだように感じました。

4月1日はみんな新たな事業所に通所、慣れない通所、通所方法の変更などに対応しみんな元気に登所してくれました。みんなで記念写真を撮り新たな事業所をスタートさせました。

近くにお越しの際は気軽にお立ち寄りください。

新住所　和歌山市舟津町2丁目9番3

（六星舎　森　貴孝）

社会福祉法人一麦会 正職員辞令式

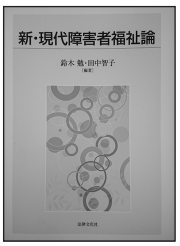
社会福祉法人一麦会正職員辞令式を2021年3月31日に開催しました。2021年度に正職員になる人は、労働支援部2名、就労・相談支援部2名、地域生活支援部1名、子ども支援部1名、事務管理部1名です。代表して事務管理部の正職員となる西岡聡子さんより麦の郷の理念を発展させ、なかまの権利と発達を保障するとの誓いの言葉が述べられました。

（理事長　山本　耕平）

本の紹介

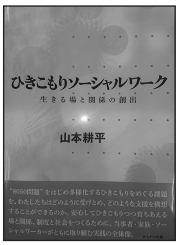
新・現代障害者福祉論

佛教大学名誉教授の鈴木勉先生（麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所顧問研究員）が編著者となられている「新・現代障害者福祉論」（法律文化社）が2019年9月に出版されています。同書は、３部14章構成となっています。障害者福祉論というタイトルの本はたくさんありますが、本人と家族の人権保障・発達保障を明確に打ち出し、資本主義社会で障害者問題がどのように作り出されているのかを分析しているこの著書は読み応えのある所です。



ひきこもりソーシャルワーク ー場と関係の創出ー

麦の郷理事長（佛教大学教授）の山本耕平が、この度、「ひきこもりソーシャルワーク　ー場と関係の創出ー」を出版しました。同書は、ひきこもりの背景となっている社会背景を明確に分析するとともに、ひきこもり支援に求められる支援者と当事者の関係性は協同的関係性であることを強く主張しています。また、第５章では、ひきこもり支援に取り組む方法を、それぞれの局面との関わりで詳細に述べられています。



はぐるま共同作業所ラ・テール　事業所紹介

ラ・テールは、今年３月から新しい風を吹かせてくれるメンバーが2名増え、職員も入れ26名となりました。みなさんご存知でしょうか ?! ラ・テールと言えば…びっくりするほどのコンテナが山積み…（笑）なんです。本当にみかんの時期はどんだけ来るの ?! と思うほどのコンテナで、果実を生産者さんが持って来てくれるのです。

作業場では朝早くから帰宅時間まで洗浄機で果実を洗い、搾汁機に投げ入れる「ゴトン、バタン」の音と共に搾り、大きな鍋で炊いてジュースやジャムに加工し、充填、瓶詰め、すごく熱く、暑く大変な仕事で、夏が近づいてくるとトマトジュースもあり、パルパーという大きなミキサーも使い、鍋で本当に倒れそうになるくらい温度も上げて仕上げるので、みんな汗ビショビショになりながら自信と誇りを持って、すごく美味しいジュース、ジャムを作ってくれています。それ以外にも米粉食パン、豆腐、パウンドケーキ、おかき、チーズケーキ、サブレなどもすごく頑張って作っています。

これからも生産者さん、それを買ってくれるお客様に喜んでもらえるよう、地域、社会に貢献し、みんなで頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いします。　（ラ･テール　松田　康代）

むきのひと

サポートセンター麦の郷
矢野　綾加

麦の郷の職員として働く中で感じたこと

私は「サポートセンター麦の郷」で計画相談を担当しています。

障害を持っておられる方のしんどいところなど、お話を伺い本人さんに合ったサービスの提案をしたり、事業所さんを紹介したりしています。

本人さんや家族さんから色々なお話を聞かせてもらったり、サービスを繋げていけるように他の事業所さんと一緒に動いたりする中で色々な考えや思いに触れることも多々あります。今まで自分の考えや意見を持ち、それを伝えることが苦手だったのですが、この仕事を通して自分の考えも持ち、周囲の考え方も聞き客観的に判断していくこと、時には周囲の考えに流され過ぎないようにしていくことが大切なのだと気づきました。

まだまだ勉強不足なところも多くありますが、しっかりとサポートしていくことが出来るよう成長していきたいなと思います。

イラスト：KAN-Z